

「核に関する学問と社会—自己組織化と多様性／普遍性」

岩田 修一

(東京大学)

福島第一原子力発電所の事故「FUKUSHIMA」を真摯に受けとめて、新たな工学の構築への予備的考察を継続している。当日は、そのファセットの一部を紹介する。

国内では、依然として「地震」・「津波」・「核」による災害・事故の克服への努力が続いているが、時々刻々と噴出する眼前の課題の着実な解決とともに、世代を超える新しい発想の力強い行動計画の作成と実行が必要である。地震や津波は今回が最後ではない。次の大きな地震や津波が何時なのか、何処なのか、どの程度なのかは誰も予測できない。「FUKUSHIMA」に関するデータ、知識の徹底的な再編を通して、他の不確実性の高く時定数も異なる様々なリスクへの周到な準備が必要である。

歴史的には電力供給サービスは人工物としても制度としても典型的な垂直統合型の社会システムとして形成された。大規模発電設備の立地、製造、運転、送電網等のハードウェア、料金、許認可、資材調達、環境影響等のソフトウェア、そして多方面にわたる人材供給にかかわるヒューマンウェアが相補的に堅固なグリッドを形成することによって、社会へのサービスを提供してきた。そこでは、科学・技術だけでなく、経済、環境、社会、制度、政治、軍事が複雑に絡み合っ、様々な価値感が交錯し自己組織化した結果、設計問題としては自由度の少ない課題となってしまった。多様性／普遍性を軸に新たな展望を拓けないだろうか？